The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	帝国日本の従軍僧研究に向けて ： 日露戦争第9師団従軍布教使佐藤巌英の生涯と著作
Author(s)	稲田, 光太郎
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 189-199
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

帝国日本の従軍僧研究に向けて
――日露戦争第９師団従軍布教使佐藤巌英の生涯と著作――

稲　田　光　太　郎

１．はじめに

１－１．問題の所在と本稿の課題

仏教において不殺生戒が存在することは、もはや取り上げて語る必要もないほど一般的に知られている。生命あるものを殺すことは仏教の罪の中で最も重く、生きものを殺してはならないという不殺生戒は、五戒・八斎戒・十戒の第一に挙げられ、在家者もこれを犯してはならないとされる[1)]。殺生を犯したものが落ちる地獄は源信の『往生要集』に描かれ、浄土信仰と日本人の来世観に影響を与えてきた。しかしながら、近代日本の経験した対外戦争において、不殺生戒は在家出家を問わず容易に破られ、各仏教教団は戦争を正当化しさえした。大義のもとでの殺人が是とされたばかりか、それこそが仏教の説く慈悲の実践であるともされたのである。

本稿は、戦場における殺生と仏教的信仰の関係という局面から、帝国日本における戦争と仏教の関係、ひいては、近現代日本における仏教のあり方を問い直そうとする筆者の研究の序説にあたる。その際に重要な手がかりとするのは、戦場で兵士と密接に関わる位置にいた従軍僧という存在である。従軍僧とは、その名の通り「軍隊について戦地に赴く僧侶」のことである[2)]。僧侶の従軍は、近代日本が経験した最初の大きな対外戦争である日清戦争の際にはすでに始まっており[3)]、教団からの働きかけに陸海軍が応じたこともあって、その後拡大した[4)]。『風俗画報』第333号（1906年１月）所載の記事「第３軍戦病死者招魂祭」に、「閣下の側方なるは軍楽隊、碑の右側は従軍僧」という用例が見られることを考えると、従軍僧の存在は遅くとも日露戦後には周知されていたことがわかる。なお、日露戦争時の軍隊における従軍僧の位置づけは、従軍記者などと同じく軍属であった。

士気の鼓舞や、傷病兵の慰問、戦没兵の葬送を担っていた従軍僧は、戦場で兵士と密接に関わる位置にいた仏教者であるという点で、前述したような問題意識に立つ筆者の研究の重要な手がかりであるが、後述するようにいまだまとまった研究はなされていない。そこで、本稿では「念仏師団」として知られる陸軍第９師団で従軍布教使[5)]を務めた佐藤巌英（1875-1918）の事例に注目し、彼の生涯を辿り著作を整理するという基礎的な作業を

通して、従軍僧への視点を構成する作業を試みてみたい。佐藤巌英はその生涯において国内外にわたって広く布教活動を行い、多数の著作を残した。そして、巌英が従軍した陸軍第９師団は、日露戦争において「南無阿弥陀仏」を唱えて旅順要塞に突貫した死をも畏れぬ兵隊たち、日本陸軍の最精鋭として知られていた。念仏を唱えながら死地に赴いた「念仏師団」のエピソードは、戦争と仏教の断ちがたい関係性を象徴的に示していると言えるだろう。

あらかじめ断っておかねばならないが、本研究において筆者は、ことさらに特定の個人や教団の戦争責任を追及し糾弾する意図はない。末木文美士の述べる通り、「今日から過去の思想を振り返って単純に批判することは、容易であると同時に不毛」である[6)]。まして、他を批難することによって特定の思想や社会集団の評価を相対的に高めるつもりもない。宗教の持つ暴力性は日本仏教に限った問題ではなく、世界中のあらゆる宗教が神（あるいは神々）の名のもとで聖戦を、殺戮を行なっているからである。しかし、従軍僧研究をより広い視野――たとえば、日本仏教の暴力性、宗教者の帝国意識、総力戦下の宗教、より広くは仏教の近代化など――のもとで構成して提示することができれば、従軍僧研究から日本の宗教思想史そのものを問い直すこともできるのではないだろうか。筆者はこのような問題意識と研究の展望を抱いている。

１－２．研究史の概観と先行研究の整理

戦争と仏教というテーマに関わって、近代日本の仏教が対外戦争において果たしてきた役割を明らかにした研究は少なからず存在する。その嚆矢は、市川白弦『仏教者の戦争責任』（春秋社、1970年）であろう。その後、帝国日本と最も密接な関係のあった浄土真宗や、国粋主義的な日蓮主義運動を展開した田中智学および国柱会の研究を中心に研究は進展した[7)]。そして、2001年に日本語訳が刊行されたブライアン・アンドリュー・ヴィクトリアの『禅と戦争――禅仏教は戦争に協力したか』（光人社［原書1997年］）は国内外に非常に大きな衝撃を与えた。宗派と僧侶の実名を挙げられ批判された臨済宗妙心寺派が、同年に宗議会で「非戦と平和の宣言」を採択したことからも、本書の影響力が窺われよう[8)]。市川の研究を嚆矢とし、ブライアンの『禅と戦争』を起爆点として、戦争と仏教を扱う研究は飛躍的に増え、戦争と仏教は、近年隆盛を迎える近代仏教研究の主要なテーマのひとつとなっている[9)]。最近の研究としては、小川原正道『近代日本の戦争と宗教』（講談社、2010年）、同『日本の戦争と宗教1899-1945』（講談社、2014年）や新野和暢『皇道仏教と大陸布教――15年戦争期の宗教と国家』（社会評論社、2014年）などが挙げられる。

このように、戦争と仏教に関しては一定の研究の蓄積があり、目下盛んに研究されているが、実際に戦争の最前線に立った兵士の信仰や、兵士の信仰の側に立った従軍僧をめぐ

る研究は、いまだ発展途上にある。これまでの従軍僧を対象にした研究はいずれも分量が少なく、当該研究者と関係の深い宗派にのみ焦点を当てるにとどまっており、まとまった研究と呼べるものは存在しない。紙幅の都合上、代表的なものを挙げて先行研究の整理に代える。

従軍僧研究で先駆的なものは吉田久一の『日本近代仏教社会史研究』（吉川弘文館、1964年）である。本書において吉田は、記述は少ないながらも、日清戦争期の従軍僧について、派遣に際しての各宗派全体の動きを簡潔にまとめている。しかし、日露戦争期の従軍僧に関しては、後方軍事支援事業を扱うに留まっている。その後、とくに90年代以降に研究は進展し、浄土真宗の従軍僧については野世英水「真宗における従軍布教の歴史と役割」（『印度學佛教學研究』第41巻第２号、1993年）、名和月之介「仏教と軍事援護事業――日清戦争における西本願寺の事業を端緒として」（『四天王寺国際仏教大学紀要』第40号、2005年）、寺戸尚隆「15年戦争期の従軍布教――中国における真宗の活動を中心に」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』29号、2007年）など、日蓮宗については安中尚史「日清・日露戦争における日蓮宗従軍僧についての一考察」（『日蓮教学研究所紀要』第24号、1997年）などが代表的な研究成果として挙げられる。しかし、これらの研究は一宗一派に偏っており、自宗の歴史的・思想的枠組の中でしか従軍僧の活動を捉えていないと言わざるを得ない。これは、特定の宗派の研究所に所属する研究者（かつ、多くは仏教者）や、僧籍を持つ在野の研究者にのみ従軍僧研究が担われてきた結果といえよう。

本稿で取り上げる佐藤巌英に関しては、先行研究と呼べるものは極めて少ないが、いくつか言及が見られるので、ここに紹介しておく。まず、大濱徹也は巌英の存在と「念仏師団」のエピソードを参照し、将校が説いた「死ねば弥陀の浄土だ、活（いき）れば金鵄勲章だ」という論理を「かつて一向門徒が弥陀一仏の念願にもえ、門徒持ちの国をめざして一揆した心を、国家（金鵄勲章の世界）に置き換えたものにほかならない。一向門徒が持つ弥陀の浄土への祈願が、みごとにすりかえられている」と評している[10]。そして、ブライアンも第９師団の要職に就いていた林銑十郎の回想録を挙げ、戦場での真宗の信仰を紹介している[11]。また、前掲の小川原正道『近代日本の戦争と宗教』や蓑輪顕量『日本仏教史』（春秋社、2015年）にも「念仏師団」と巌英への言及が見られるが、これらは大濱とブライアンの研究にほぼ依拠している。そして、巌英の息子で仏教学者の佐藤哲英[12]（1902-1984）が、息子の視点から父の足跡を辿った『人生行路――佐藤巌英の人と生涯』（百華苑、1967年）を著しているが、これは客観的研究というよりもむしろ息子の視点から表された父の伝記である。

２．佐藤巌英の生涯

前述したように、巌英の息子の佐藤哲英は、宗英・巌英・哲英という佐藤家３代の歴史を、巌英を中心に『人生行路』に記している。本章では、基本的には『人生行路』に依拠しつつも、巌英の著作を参照することにより事実関係の整合性を検証し、適宜事蹟を補いながら、巌英の生涯を素描する。

２－１．出生から布教活動の開始まで

佐藤巌英（正式な表記は「巌英」）は、明治８年（1875年）９月８日、伊勢国員弁谷郡丹生川郷（現在の三重県いなべ市大安町丹生川）の浄土真宗本願寺派の寺院、持光寺に生まれた。明治21年、巌英は14歳で西本願寺に上り得度し、明治27年に本願寺派大学林（現在の龍谷大学）に入学、在学中の明治30年に父宗英が死去して持光寺住職となる。

在学中から伝道布教活動に勤しみ、大学林を卒業した翌年、明治33年に西本願寺の教学職に就任する。明治34年には講演の原稿をまとめた処女単行本『理想の真宗――大乗起信論に躍動せる救世者の使命』を出版した。布教活動が評価されてか、同年８月に金沢第９師団付従軍布教使に任命され、金沢へ移住する。このとき巌英は27歳であった。

２－２．金沢在住時代――日露戦争従軍――

金沢で巌英は、『金沢別院沿革史』の編纂に携わる一方で、第９師団の将兵を対象とした仏教講話会「維摩会」を主催し、定期的に講話を行なった。維摩会は回を重ねるごとに参加者を増し、明治35年には、講演録『胸中の金仙花』を、師団司令部の後押しにより陸軍省内の出版所から刊行している。また、第９師団の将校婦人会においても定例の講話会を受け持っていた。従軍布教使としての活動のほかに、巌英は金沢において「仏教道友会」なる仏教青年会の結成・運営に携わっている。この会は第四高等学校、金沢医学専門学校、石川県師範学校の学生を中心に結成・運営されたもので[13]、160名もの学生が参加し盛んに活動していた。

明治37年（1904年）２月に日露戦争が始まると、第９師団は乃木希典率いる第３軍に属し、旅順攻略に加わることとなる。旅順要塞包囲戦は熾烈を極め、第９師団はほぼ全滅に近い１万５千人もの戦死者を出した。第一次総攻撃はことごとく失敗に終わるが、第９師団第35連隊の攻撃のみが成功し、その際に同連隊第２大隊は「南無阿弥陀仏」を一斉に唱えながら突貫していったという。日露戦争において、第９師団は陸軍の最精鋭師団とうたわれることとなるが、この念仏突貫は、第９師団の勇猛ぶりを示す有名なエピソードであり、このことから「念仏連隊」あるいは「念仏師団」と呼ばれることとなった。

このとき30歳であった巌英は、ほかの僧侶とともに従軍布教使として戦列の末端に加わり、旅順要塞攻撃から奉天会戦まで同行している。巌英は兵の看護や遺体の収容などにつとめる一方、従軍布教使として士気を鼓舞し布教を行なった。軍属である従軍僧は、少なくとも日露戦争期においては直接戦闘に加わることはなく、看護や慰問、戦死者の葬儀が活動の大半を占めていたと推測される。葬儀は夜間に戦場で営まれたため、念仏の声を狙って敵陣から発砲されることもあった。

明治38年５月に日本海海戦でバルチック艦隊が壊滅し、停戦の機運が高まったことで巌英は帰国する。そして、巌英は第９師団管下の各地において、戦況報告演説会に参加して戦場の模様を伝えた。新聞の号外などでしか戦況を知る方法を持たない当時の国民は、連日戦況報告会に詰めかけたという。また、日露戦争終結後の明治42年に第９師団遺族40名とともに旅順など各地の戦跡を訪れ、戦没者の七回忌法要を行なっている。

２－３．日露戦争後――東京移住――

日露戦争終結のあと大正５年に病に倒れるまで、巌英は国内外において伝道布教活動を精力的に行なった。本願寺から築地本願寺駐在布教使に任じられた巌英は、明治40年に東京へ移住する。明治42年２月から８月にかけて、「鉄道布教」と称し東海道線・関西線・房総線の主要駅に出かけて通俗講演を行なった。また、翌年には神田猿楽町に明治会館[14]を設立し、主幹として移り住んだ。明治会館では仏式結婚・少年教会・合唱団など、当時の築地本願寺では行なっていなかった新しい伝道活動を展開する。このほか、官庁・会社・工場・病院[15]など新しい場所と形式での布教を考案し実行している。

この時期の巌英は、政府の政策と教団の動きに密接に関わりながら布教活動を行っている。政府は日露戦後の世情を鑑みて、明治40年に戊申詔書を発し国民道徳の作興を図った[16]。これを受け、浄土真宗本願寺派は「内国布教総監部」を置いて伝道活動を展開する。巌英は総監部の賛事を務め、自ら総監部付巡回布教師として活動した。この時期の著作に『戊申詔書衍義』、『仏教と国運発展』、『民性涵養と仏教』などがある。これらの著作の出版には、政府の政策およびそれに付随する本願寺派の動きが大いに反映されている。また、戊申詔書の発布により展開された地方改良運動に関しても、巌英は強い関心を持って各府県庁などで講演を行なった。

２－４．海外布教――晩年――

明治44年（1911年）、浄土真宗は宗祖親鸞の650年大遠忌という大事業を抱えていた。遠忌に際し本願寺派では、海外に移民した日本人信徒を慰問し宗祖の遺徳をしのばせる計画が立てられた[17]。巌英はこの海外伝道の使命をおびて、同年３月に渡米した。当時の開

教総長であった内田晃融のもと、サンフランシスコの開教本部を基点に、ロサンゼルス・シアトル・バンクーバーなど北米西海岸各地を１年かけて巡回し、日本人移民を慰問して翌年の３月に帰国した。

アメリカでカーネギー図書館を見聞し、各地の図書館が郷土の文化センターとして機能していることに感銘を受けた巌英は、帰国後に自坊持光寺の庫裏の再建を行い、庫裏の半分に図書館・ホールを設け、会館として利用できるようにした[18]。帰国後も、国内各地で布教活動を行なっていたが、大正２年６月末に本願寺派ハワイ開教総長の今村恵猛の懇請によりハワイへ渡り、各島で伝道布教を行なって翌年に帰国した。

その後も国内で精力的に布教活動を行なっていたが、大正５年１月に自坊の檀家の報恩講の帰りに病に倒れ、大正７年10月24日、巌英は44歳の若さでこの世を去ることとなった。３年弱の闘病生活の間、神経系の難病で下半身不随になった巌英は、自らの講演活動を著作に残すため、文筆活動に専念する。『実験講話 自治と宗教』、『仏教新講演』などを著したほか、大正10年に控えた聖徳太子1300年聖忌を目指し、聖徳太子の伝記の執筆を進めた。聖徳太子に縁のある郷土に生まれた巌英は、生涯深く聖徳太子に帰依し、自らを慕聖庵主人と号したほか、明治37年には郷土で「聖徳奉賛会」を結成するなどもしている。存命中の完成は叶わなかったが、死後に遺作『聖徳太子伝講演』が出版された。

３．佐藤巌英の著作解題

巌英が布教使として活動した期間は長くはなかった。そのうち従軍僧として活動したのは５年に過ぎない。その短い生涯を追っていくと、巌英の活動は日露戦争以前／以後の２期に大別できることがわかる。そして、この活動時期の区分によって、著作も、⑴従軍僧時代に戦争と仏教というテーマで書かれたもの、⑵日露戦争後（戊申詔書発布後）に国民道徳作興の目的で書かれたものの２種類に大別できる。以下、【図表１】を踏まえつつ、それぞれの特徴を解説する。

３－１．⑴戦争と仏教に関する書籍

第９師団付布教使として金沢に滞在し、日露戦争に従軍して終戦を迎えるまでの５年間、巌英は、従軍僧としての立場から、将兵やその家族に向けて戦争を語った。この時期の著作としては、『胸中の金仙花』・『武士道 精神講話』・『第九師団凱旋紀念帖』のほか、「軍人心の友」（真谷旭川編『日露戦争と仏教』所収）・「陣中名号の趣意」（法蔵館編『軍国布教資料』所収）・「慧澄律師の開眼」・「奈破崙（ナポレオン）の話」・「仏教と武道」（八尋慈薫編『実地応用　軍国と布教』所収）がある。筆者の意図する従軍僧研究において最も注目すべき資料である。

図表１　佐藤巌英著作一覧（※筆者作成）

発行年	書名	発行者	備考・解説
1901年	『理想の真宗 大乗起信論に躍動せる救世者の使命』	興教書院	馬鳴著『大乗起信論』を通俗的に解説。
	『胸中の金仙花』	金文堂	翌年出される全３巻の講義録とは異なり、これは講話会の会員向けの教科書のようなもの。
1902年	『胸中の金仙花 雪の巻 理想篇』	川流堂（小林又七）	佐藤巌英述、堀仙庵記。『理想編』では戦地に赴く軍人の心構えを仏教の側から説く。『護国編』は日本仏教の歴史を、『人物編』では仏教と関わりのあった歴史上の偉人を紹介している。
	『胸中の金仙花 月の巻 護国篇』		
	『胸中の金仙花 花の巻 人物篇』		
	『武士道：精神講話』上・下巻	川柳堂（小林又七）	軍人に対して講演したもの。真宗と禅宗の精神が武士道の精神と合致することを説いている。
1903年	『本派本願寺金沢別院沿革史』	本派本願寺金沢別院	佐藤巌英編。本派本願寺金沢別院の沿革史を記している。
	『日清戦役 軍馬記念碑考』	軍馬紀念碑祭典事務所	小冊子。戦死した軍馬の供養に際して、師団司令部から依頼され著したもの。
1904年	「軍人心の友」	興教書院	真谷旭川編『日露戦争と仏教』所収。浄土真宗本願寺派が門徒に対して戦争における心構えを示した書。
	「陣中名号の趣意」	法蔵館	法蔵館編『軍国布教資料』（戦時教材第３編）所収。軍人の心構えを説く。弾除け祈願を否定し、死を畏れず闘うことで救いが得られると説く。
	「慧澄律師の開眼」		
	「奈破崙(ナポレオン)の話」		
1905年	『第九師団凱旋紀念帖』	北陸館	佐藤巌英編。第９師団の日露戦争での戦歴を巌英の視点から書き残している。
	「仏教と武道」	興教書院	八尋慈薫編『実地応用 軍国と布教』（後篇）所収。『武士道 精神講話』と重なる主張。
1907年	『仏典中ノ医術』	金沢医学専門学校十全会	仏典に存在する医術から、医療に携わる際の心構えを説く。
	『勅語衍義 奉公紀念』	興教書院	日露戦争後、明治天皇から本願寺派法主（大谷光瑞）へ与えられた勅語を解説し、さらに忠君愛国に勤しむよう説いている。
	『二宮尊徳翁と仏教』	興教書院	曹洞宗に所属した仏教者として尊徳の活動を評価・解釈し、また仏典から報徳思想を説明している。
1909年	『戊申詔書衍義』	興教書院	戊申詔書を解説、国運発展と民風作興を説く。
	『仏教と国運発展』	京都本願寺内国布教総監部	戊申詔書に基づき、仏教の立場から国運発展に資するための方法を説く。
1910年	『民性涵養と仏教』	本派本願寺	大八木大行編。国民道徳を育むため、国民を仏教で教化することが重要であると説く。
	『国富増進の要義』(第2巻)	関次郎	大八木大行編『本派本願寺 臨時布教紀念施本』（全10巻）のうち、巌英が記したものが４冊ある。当時の時局を説明し、それに応じて持つべき国民の心構えを説く。
	『国運発展の好機』(第3巻)		
	『国民教化の変遷』(第7巻)		
	『国民教養の大本』(第8巻)		
	「仏教と自治改善」	興教書院	興教書院編『富国の礎 産業と仏教』（上下巻）所収。巌英が自治問題に関心を持って記した論稿。前後年の著作と同様、戊申詔書から強い影響が見受けられる。
	「仏教と農事改良」		
1911年	『光顔院殿如性尼公』	明治会館出版部	佐藤巌英編。同年の『婦人雑誌』（26号、婦人雑誌社）にも掲載。30歳で夭逝した大谷派法主の妻籌子（大正天皇の皇后の姉）の生涯を記す。
1912年	「国運発展の好機」	興教書院	興教書院編輯局編『国民特性二諦の発揚』（前後編）所収。前々年に出された『本派本願寺 臨時布教紀念施本』および『民性涵養と仏教』と同一の記述。本願寺派が出した施本や仏教学者の論稿などをまとめたもの。井上哲次郎や赤松連城、前田慧雲などの論稿も収められている。
	「国民教化の変遷」		
	「国民教養の大本」		
	「国富増進の要義」		
	「民性涵養と仏教」		
	「日米の将来」	日の本商会	渡辺久克編『母国へ』（在米日本人叢書第１巻）所収。渡米した巌英が在米日本人に向けて語ったものであり、宗教者の対外意識・アジア観が窺える。
1914年	『讃仰歎異鈔講話』	興教書院	『歎異抄』を題材として本願寺派北海道教区で行われた講話会の記録。
1917年	『実験講話 自治と宗教』	興教書院	地方自治問題に関して記した書。仏教による道徳教育が自治に不可欠だと説く。
	『仏教新講演』	興教書院	浜口恵璋編。通仏教・真宗二諦論・所感の３部に別れており扱うテーマは多岐にわたる。
1921年	『聖徳太子伝講演 附・十七憲法講演』	興教書院	聖徳太子の事跡を整理し、聖徳太子の教えを実践し国民道徳を育むことを説く。

従軍僧として佐藤巌英はいかにして戦争を語ったか。考えるべき事柄は多岐にわたるが、この点についての詳細な分析は、巌英の生涯と著作を紹介することを意図した本稿の目的から外れるため、別の機会に譲らざるをえない。さしあたり、ここでは、巌英の著作から典型的な叙述を引くことで、必要最小限の紹介を行いたい。

巌英は、「軍隊は宗旨を云へば忠義宗、本尊を云へば御真影、若しくは軍旗、経典を云へば、宗教に於ける幾万の信徒あるとも、是れを統一して其の精神を一味の信念に導く経典の如く、五ヶ条の勅諭（軍人勅諭）と読法とは〈中略〉仏教の経典に少しも異なる処はないのである」として、軍隊を仏教教団にたとえている[19]。巌英は、軍隊と教団を重ねあわせることで、従軍することは仏道の修行にほかならないと説いているのである。

では、不殺生戒はどうなるのであろうか。不殺生戒が存在する以上、殺戮行為をともなう戦争は、本来、仏教においては罪悪であるはずである。この点と関わって注目されるのは、巌英の引く次の古歌である。ここには、巌英の戦争観と、彼が兵隊たちを戦闘に駆り立てようとした際のロジック／レトリックを如実に見て取ることができる。

阿弥陀仏と 打ち込む太刀と諸共に 敵も味方も西の浄土へ[20]

巌英は、「仏や菩薩は軍に従ひて敵を討ち、敵を殺さゞるに非らずやと云ふに、決してそふでない、菩薩にして、身を国王即ち引接王の為に献（ささ）げて、五の希望を全からしめたるに、龍猛菩薩あり、また釈尊は悪賊を殺し玉ひしが因となりて仏となられし〈中略〉仏教の精神に基きても宇宙の真理に基きても斯くあらんかを信ずるのである」[21]と、菩薩が王に仕え釈迦が敵を討ち滅ぼした例を挙げ、仏教における不殺生戒と戦争での殺人は矛盾しないとする。そればかりか、従軍して敵を殺すことが仏教の精神に則っているとするのである。

従軍は仏道の修行であり、軍人は菩薩となる。そして、極楽往生するのは戦死した日本軍人だけではない。慈悲の心で敵兵を殺せば、自分が極楽往生するばかりでなく、敵の魂を救済し「西の浄土へ」送ることができる、と巌英は兵士に説いた。このように見てくると、上記の古歌には当時の従軍僧の戦争観が集約されているといえるだろう。

３－２．⑵日露戦争後に国民道徳作興の目的で著された書籍

従軍を終え帰国して『第九師団凱旋紀念帖』などを著したのち、東京に移住して以降、巌英は戦争と仏教に関する著作を一切書いていない。また、戦場での心得を軍人に説いた記録も管見の限り見つからない。

従軍僧としての活動が評価されたためか、日露戦後、巌英は布教使としての活動範囲を

広げ、多様な論題で講演を行った。巌英はこれらの講演を通して、日露戦後の時局に応じるかたちで仏教を説いた。この時期の著作としては『二宮尊徳翁と仏教』、『戊申詔書衍義』、『民性涵養と仏教』などがあり、これらには「戊申詔書」発布後の思潮が強く反映されている。この傾向は晩年まで続き、亡くなる前年の『実験講話 自治と宗教』や『仏教新講演』にも同様の特徴が見受けられる。

従軍僧としての活動からは外れるためここでは詳説しないが、巌英は日露戦争後から病没するまで、「戊申詔書」で説かれた国運発展と民風刷新の道を、仏教の教えに依拠することであまねく国民に知らしめようとしていた。日露戦後に軍人の心得を語らなくなったということは、必ずしも戦争と仏教を語らなくなったということではない。戦争と仏教の問題は、戦後に国家・国民と仏教という大きなテーマに集約され、国民の道徳や国家の行末という問題に絡めながら説かれるようになる。こういった講演は、のちの15年戦争期の皇道仏教[22]と呼ばれる仏教の一形態に通じるものだろう。

このほか、処女作『理想の真宗』や『仏典中の医術』、『光顔院如性尼公』、『讃仰歎異抄講話』、『聖徳太子伝講演』など上記(1)(2)の分類に当てはまらない著作も存在する。これらも従軍僧としての活動からは外れるため詳細は割愛するが、従軍僧佐藤巌英の多岐にわたる活動を窺うことができる。

4．おわりに――帝国日本の従軍僧の研究に向けて――

いざ進め 進むおのこは人知れず 仏のみ名を唱えつつ行く

――盤龍山攻撃隊の念仏しけるを聞きて[23]

この和歌は、佐藤巌英が戦場で詠んだ軍歌である。「念仏連隊」の逸話、あるいは「念仏師団」という第９師団の評価は、むろん北陸の地に深く根ざした浄土真宗の信仰によるところが大きい。一向一揆の記憶をその土地と血脈に宿して受け継いできた北陸の将兵たちは、遠く旅順の地でその信仰を胸に宿して戦い死んでいった。では、「念仏師団」の戦いは、兵士個人の信仰によるものだったのだろうか。かつての一向宗が一国の自治を求めて戦った信仰が、大日本帝国という国家の領域に置き換わるプロセスにおいて、従軍僧は仏教徒でありながら戦死と殺人の説法を行ない、進んで国家の体制に関与し国家のロジックに加わった。この従軍僧という最も実践的な存在の実態と影響力をより深く検証することで、個人の信仰が軍事行動と有機的に結びつく、その実情を捉えることが出来るのではないだろうか。戦場の兵士が殺人への忌避感情と死への畏れに抗うために宗教が果たした役割は、重く受けとめ批判的検討を加える必要がある。

本稿では冒頭に記した問題意識のもと、研究の端緒として佐藤巌英の生涯を取り上げた。

一宗一派にとらわれない総体としての従軍僧像を構築し、その活動の実態と影響を考えるためにはさらなる課題が残されている。その課題を確認することで本稿の結びとしたい。

まず、従軍僧の戦地での活動を、国家や軍隊はどのように評価し利用したのだろうか。そして、教団はどのような意図をもって従軍僧を派遣し、戦争に関与したのだろうか。これらを解き明かす制度史的な基礎研究が第一の課題である。そして、当然のことであるが、佐藤巌英に限らず幅広く従軍僧の活動と言説を確認しなければならない。浄土真宗本願寺派だけでなく、他の宗派がどういった論理で死や殺人をめぐる兵士の信仰に関わったのか検証する必要がある。巌英の説いた「阿弥陀仏と 打ち込む太刀と諸共に 敵も味方も西の浄土へ」の和歌に表れている、敵兵を殺すことで極楽往生させることができるという思想は、極めて過激であり、オウム真理教のポアを彷彿とさせる[24]。この思想は、国家のために戦死すると極楽往生できるというような、味方の死のみを対象とする思想からさらに一歩踏み込んでいると言えるが、他宗派の従軍僧の言説を分析することではじめて、巌英とその言説の相対的な位置を明らかにすることが可能になるだろう。そして、従軍僧に対する兵士の評価も考えなければならない。兵士が残した膨大な従軍記・手記に従軍僧の姿は散見されるが、それを集成し分析した研究は存在しない。従軍僧を兵士や一般の国民の側から捉えなければ、従軍僧の評価は一面的なものに過ぎなくなってしまう。帝国日本の従軍僧研究に向けて、課題は山積している。

注

1）中村元ほか編『岩波仏教大辞典』第２版、岩波書店、2002年

2）『日本国語大辞典』第２版、小学館、2001年

3）中西直樹「日本仏教の初期台湾布教（１）――従軍布教から占領地布教へ――」、龍谷大学『佛教文化研究所紀要』53号、2015年、pp.84-108

4）日露戦争に際して陸軍は布達を発して僧侶の従軍について規定している（JACAR：C08070653300、C08070662500、明治37年「陸達綴」防衛省防衛研究所）。ただし、この史料においては「従軍僧」という言葉は用いられていない。

5）「従軍布教使」は、浄土真宗本願寺派に「布教使」という役職が存在するため、浄土真宗の従軍僧を指して使われた言葉である。ゆえに、本稿においては、従軍し戦場に赴く僧侶一般を「従軍僧」と表記し、とくに浄土真宗の役職を指す場合は「従軍布教使」という言葉を用いることとする。

6）末木文美士「内への沈潜は他者へ向いうるか――明治後期仏教思想の提起する問題」、『思想』第943号、岩波書店、2001年、p.2

7）代表的なものを挙げておくと、浄土真宗の戦時教学については福嶋寛隆監修『戦時教学と真宗』（永田文昌堂、第１巻1988年、第２巻1991年、第３巻1995年）や、大西修『戦時教学と浄土真宗――ファシズム下の仏教思想』（社会評論社、1995年）などがあり、また日蓮主義に

関しては戸頃重基『近代社会と日蓮主義』（評論社、1972年）、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』（法蔵館、2001年）などがある。

8）「非戦と平和の宣言文」（http://www.myoshinji.or.jp/about/heiwa.html、2015/11/15最終閲覧）

9）大谷栄一「近代仏教研究は何を問うのか――とくに2000年代以降の研究動向を中心に」（『日本思想史学』第46号、2014年）参照。

10）大濱徹也『庶民の見た日清・日露戦争――帝国への歩み』、刀水書房、2003年、p.223（初出は1970年）。また、巌英の論稿「仏教と自治改善」（興教書院編『富国の礎　産業と仏教』、1910年）を紹介し、地方改良運動に関わる諸事業が報徳思想のみならず、真宗の教義に合致するように説かれたとしている。大濱徹也編『兵士　近代民衆の記録８』（新人物往来社、1978年）に、巌英の著した『第九師団凱旋紀念帖』（北陸館、1905年）の一部が収録されている。

11）前掲『禅と戦争』、pp.30-31

12）龍谷大学名誉教授で、浄土真宗本願寺派勧学を務めた。著作に『天台大師の研究』（百華苑、1961年）などがある。

13）金沢医学専門学校（金沢医専）はのちの旧制金沢医科大学。第四高等学校、金沢医科大学、石川県師範学校はその後３校ともに金沢大学に包括・合併され現在に至る。

14）大正元年の神田大火で消失し、現存しない。

15）前陸軍医総監の高木兼寛が院長を務める慈恵病院（現在の慈恵医科大学附属病院）の看護婦を対象とした精神講話を月例で行っていた。

16）日露戦後の表面化する地方社会の荒廃と疲弊、個人主義的な快楽主義・官能主義や社会主義的思想の台頭などの風潮に対処するため、国運発展の道は勤倹貯蓄・産業奨励・民風作興にあると国民に示すことを意図していた。

17）本願寺派は、明治31年にはすでに薗田宗恵開教総長のもとアメリカに開教していた。

18）この図書館は大正図書館と命名され、今日まで現存している。「いなべまちかど博物館：三岐線沿線エリア 大正図書館博物館」（http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/matikado/da/detail?kan_id=835528、2015/11/15最終閲覧）参照。

19）佐藤巌英『武士道 精神講話』下巻、川柳堂、1902年、p.51。括弧内は筆者による注記。

20）前掲『武士道 精神講話』下巻、p.50。巌英は「古歌」として引いている。これと酷似した歌が、入井善樹「続々 親鸞の「利他」の思想」（『東方』22号、2006年）に一向一揆の時代のものとして引かれているが、典拠は不明であり、今後調査が必要である。

21）佐藤巌英『胸中の金仙花 雪の巻 理想編』、川柳堂、1902年、pp.74-75

22）新野和暢『皇道仏教と大陸布教――15年戦争期の宗教と国家』（社会評論社、2014年）参照。

23）佐藤巌英『第九師団凱旋紀念帖』、北陸館、1905年、p.2

24）森雅英「仏教における殺しと救い」（立川武蔵編『癒やしと救い――アジアの宗教的伝統に学ぶ』玉川大学出版部、2001年）参照。

（いなた　こうたろう　大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）